もも・ネクタリン情報　No.7

令和　7年　6月13日発行
JAグリーン長野営農販売部・経済部

長野県No.１のもも･ネクタリン産地を守ろう！

◆生育状況と当面する重点作業につい

生育は、昨年より3～4日程度遅れており、平年並に近く、果実肥大も、平年並みとなっている。
病害虫は、せん孔細菌病・毛じ障害・うどんこ病の発生も散見されている。

１．畦草等を中心にミカンキイロアザミウマが増えてくるので、こまめに除草を行う。
２．ハダニ類の発生が増える時期になる。高温乾燥傾向の場合は発生が倍増するので注意。
　発生が増加してからでは対策が取れないため、発生状況を観察し対策を徹底する。
３．新梢が過繁茂になってくる時期なでの誘引・捻枝・摘心を行い、徒長枝整理を行う。併せて枝幹の日焼け防止対応策を行う。
４．定期的なかん水の実施をする。干天が７～１０日程度続いたら、樹冠下に集中し２０～３０㎜程度のかん水を行なう。なお、高温が続く場合は、５～７日間隔で行う。
５．配布されている「葉面散布肥料・特殊資材の使い方」を参考に葉面散布肥料を有効活用する。
　総合的な品質向上対策として、アミノ酸等のケルパック６６、友果、オルガミン、モーニングシャイン等を利用する。

◆もも・ネクタリン栽培日誌の提出について

もも・ネクタリン出荷予定の方は期日まで提出されますようご協力下さい。

1. 提出要領:6月30(月)までに地区役員さんまで提出して下さい。
※役員さんは7月1(火)までに各流通センター・共選所まで提出して下さい。
※各個人より、各流通センター・共選所までででも結構です。この場合、役員さんに直接持って行く事を連絡して下さい。

2. 留意事項
①今回提出用の栽培日誌を配布いたしますので、記入不備の無いよう注意下さい。
②第8回防除まで記入して下さい。
※アームキング・たまき等極早生種の出荷がある方は、第7回防除まで記入し、6月20日(金)までに、個人で、各流通センターまで提出ください。
③日誌をチェックし法的に問題がある場合は、荷受けはできません。
④日誌を提出せずに出荷した場合は、日誌提出並びにチェックを受けるまで、荷受・選果・販売はできません。

◆第８回薬剤散布について

1. 散布時期:6月21日(土)～6月25日(水)　　《実際散布日記入　　月　　日》

2. 調　合　量:水100ℓ当り　※混用順に記載。

農薬名	使用量	対象病害虫	収穫前
展　　着　　剤	１０㎖	―	―
㊞デランフロアブル	１６６㎖	せん孔細菌病・灰星病・黒星病・ホモプシス腐敗病	７日
㊞バリアード顆粒水和剤	２５ｇ	シンクイムシ類・アブラムシ類	前日

※収穫直前・収穫中の品種への農薬飛散に十分注意する。

【ネクタリン薬剤防除】 ※もも・ネクタリン混植園

◆第８回薬剤散布について

1. 散布時期:6月21日(土)～6月25日(水)　　《実際散布日記入　　月　　日》
2. 調 合 量:100ℓ当り ※混用順に記載。

農薬名	使用量	対象病害虫	収穫前
展　　着　　剤	１０㎖	―	―
ベルクートフロアブル	５０㎖	灰星病・黒星病	前日
㊞バリアード顆粒水和剤	２５ｇ	モモハモグリガ・シンクイムシ類	3 日前

※収穫直前・収穫中の品種への農薬飛散に十分注意する。

3. 留意事項

①せん孔細菌病の発生が多い場合は、㊞デランフロアブル 600 倍（水 100ℓ に 166㎖・もも 7 日前・ネクタリン 14 日前）または、スターナ水和剤 1,000 倍（水 100ℓ に 100ｇ・もも前日まで・ネクタリン収穫 7 日前まで）を加用散布してもよい。ただし収穫前規制に注意する。

②降雨が多い場合は、ベルクートフロアブルを 1,500 倍(水 100ℓ に 66㎖）で使用する。

【第８回薬剤散布もも・ネクタリン薬剤防除共通】

1. 散布量:10a当り⇒500ℓ以上
2. 散布上の留意事項

①早生品種(たまき・なつき・アームキング・メイグランド・サマークリスタル等)は、除袋後防除並びに収穫２日前防除の薬剤散布を行う。

②ハダニ類の発生が心配される園は、コロマイト乳剤 1,000 倍（水 100ℓ に 100㎖／もも収穫 7 日前まで・ネクタリン収穫 7 日前まで）を加用散布する。
収穫前規制のため、飛散に十分注意する。

③カイガラムシ類の発生がある場合は、コルト顆粒水和剤 2,000 倍（水 100ℓ に 50ｇ）を加用散布する。

◆葉の健全化や光合成能力向上対策について

１．散布肥料：グリーントップ 500 倍（100ℓ 当り 200g）又はリーフマグ 1,000 倍（100ℓ 当り 100g）
２．使用時期：６月に１～３回
３．留意事項：単用散布を推奨するが、定期薬剤散布に混用してもよい。

◆除袋目安と管理について

1. 生育状況に十分考慮しながら、(高温干ばつで生育は遅れ、曇天多雨で生育は進む)別記の日程を目安に地色の抜け具合を観察し適期に除袋作業を進める。

2.除袋時の注意

1)除袋が早すぎると、無袋のようになり、着色が遅れ、遅すぎると着色せず、軟化が早くなるので、 注意する。水野ネクタリンは果実全体が黄色くなったら除袋する。

2)大玉から除袋を開始し、小玉や下枝・樹冠内部のものは上枝の除袋4～5日後に数回に分けて行う。最低でも上枝と下枝では生育差があるので2回程度に分けて除袋する。

3)除袋時に、曇雨天が続きそうな場合は、除袋時期の目安より、2日程度早めに始める。

4)老木や樹勢の弱い樹は、数日早く除袋する。樹勢の強い樹は、除袋を遅らせる。

3. 着色管理

1)葉つみは、着色ムラをなくすため果実に密着している葉を摘む。1果当たり5枚程度限度とする。
摘み過ぎないよう注意する。摘み過ぎは、着色・糖度に悪影響が出やすい。また肌荒れ・日焼け・軟化等、品質低下になる場合がある。※もも二重袋を使用した場合は、葉摘みはしない。

2)反射シートは、有袋品種で、除袋直後から使用する。無袋品種で収穫予定日の10～14日前位から使用する。 概ね着色したら軟化防止のためシートを外す。

3)支柱立て、誘引を行い樹内部に日の光が入るようにする。

4)着色先行となり、早採りを助長するので、熟度をよくみて判断し収穫する。

4. 一重袋での除袋時期の目安 (あくまで目安です。今後の気象条件・自園の状況に合わせる)

1)目安の指標:着色が容易な品種ほど除袋は遅めに。着色が困難な品種ほど早めにする。

品　種	時　期	目安の指標
アームキング	6月下旬頃	
たまき有袋	6月末頃	収穫7～10日前頃
なつき有袋	7月上旬頃	収穫7～10日前頃
水野ネクタリン	7月上旬頃	収穫7～10日前頃

◆もも・ネクタリン収穫前薬剤散布について

収穫前の重要な病害虫防除になる。特に降雨が多い場合は、影響が大きい。必ず実施し、対策を行う。

【除袋後・無袋着色始め】 ※必ず実施する。

1. 散布時期:有袋除袋後又は、無袋着色始め(収穫7～10日前頃)《実際散布日記入　　月　　日》
2. 調　合　量:100ℓ当り　※混用順に記載。

農薬名	使用量	対象病害虫	収穫前
アプローチBI	100mℓ	機能性展着剤	―
スクレアフロアブル	33mℓ	灰星病・ホモプシス腐敗病	前日
アーデントフロアブル	50mℓ	ﾓﾓﾊﾓｸﾞﾘｶﾞ・ﾐｶﾝｷｲﾛｱｻﾞﾐｳﾏ・ｼﾝｸｲﾑｼ類・ﾊﾏｷﾑｼ類	前日

【収穫開始2日前防除】 ※必ず実施する。

1. 散布時期:収穫開始2日前　《実際散布日記入　　月　　日》
2. 調　合　量:100ℓ当り　※混用順に記載。

農薬名	使用量	対象病害虫	収穫前
アプローチBI	100mℓ	機能性展着剤	―
オンリーワンフロアブル	50mℓ	灰星病・ホモプシス腐敗病	前日
エクシレルSE	20mℓ	ﾐｶﾝｷｲﾛｱｻﾞﾐｳﾏ・ｼﾝｸｲﾑｼ類・ﾊﾏｷﾑｼ類	前日

【共通留意事項】

3. 散　布　量:10a当り ⇒ 500ℓ　以上
4. 留意事項

①「収穫前日」となっている農薬の使用時期は、収穫する24時間前までに散布が終わる事を意味する。

②果柄部へも丁寧に薬剤散布を行う。

③除袋直後(ほとんど果面に日照を受けない状態)は、薬害(褐色の流れサビ斑・縞状の着色不良)が出やすいので少なくとも1～2日程度は日照をあてて散布する。

④腐敗果を発見したら被害を拡大させないために、園外に持ち出すか除去し土中に埋める。

⑤スクレアフロアブルも代えて、ミギワ20フロアブル4,000倍(水100ℓ当り25mℓ・収穫前日まで)を使用してもよい。

⑥オンリーワンフロアブルに代えて、オーシャインフロアブル2,000倍(水100ℓ当り50 mℓ・収穫前日まで)を使用してもよい。

⑦エクシレルSEに代えて、サムコルフロアブル10の5,000倍(水100ℓ当り20g・収穫前日まで)又はディアナWDG5,000倍(水100ℓ当り20g・収穫前日まで)を加用散布する。

◆せん孔細菌病と灰星病の対策を実施しよう！！

1. 感染症状と特徴

①6～8月は、本年伸びた新梢に発生をする夏型枝病斑の発生がある。
はじめ紫赤色の病斑だが，広がるにつれて紫黒色になってへこみ，枝に沿って縦長の病斑を形成する。
当年の伝染源にはなるため、これも剪除する。

②葉での発病は、はじめに葉脈で区切られた不整形の斑点ができ、淡褐色～紫褐色の斑点となり、やがて病斑部分が乾いて抜け落ち、不整形の穴になる。
梅雨期には、葉の発病が増加する。
かなり目立つようであれば、二次伝染が盛んになる。
降雨が続いて、園地内に雨水が長時間残ると、
葉の気孔が開くため、感染が起こり多発生になる。
③果実での発病は、幼果ほど感染しやすく、ピンポン玉より大きくなると感染しにくくなる。
幼果の感染後、発病まで2～3週間、ピンポン玉大で40日以上と長くなる。このため、大きくなってから感染すると、有袋栽培では、除袋後でないと発病に気づかない。又は、収穫時に発病しておらず、当年の果実品質に影響が無い場合もある。
なお、収穫時期が遅い品種ほど、多くなる傾向にある。

2. 今後の対策
①春型枝病斑の剪除に続いて夏型枝病斑の剪除をする。
切除の際は切り口の形成層を確認し、茶色い筋が見える場合は、更に多めに切除し、再発を防ぐ。
枝病斑にヤニが出ている場合、触らないようにする。触った手は感染防止のため果実に触れないようにする。
②袋掛けも果実感染を防ぐ重要な方法。
発生が多い園は、早めに袋掛けを実施する。
③薬剤防除は、効果は完全ではないが重要。
当年の果実感染を考えると、袋掛けまでが防除時期。なお、散布量を多くしてしっかり撒く事（特に発生の多い園外周）
④排水性の悪い園は、対策を行う。